

杉浦邦恵 うつくしい実験 ニューヨークとの50年

SUGIURA KUNIÉ: Aspiring Experiments New York in 50 years

2018年7月24日(火)～9月24日(月・振休)



《電気服にちなんで Ap2, 黄色》2002年 黄色で調色された
ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵

展覧会概要

杉浦邦恵(1942-)の50年にわたる活動を顧みる、日本で初めての大規模個展「杉浦邦恵 うつくしい実験 ニューヨークとの50年」を開催します。

現在ニューヨーク在住の杉浦は、1963年、20歳の時に単身渡米し、シカゴ・アート・インスティテュートで写真を学びました。卒業後、ニューヨークに移り住み、現在に至るまでチャイナタウンのスタジオで創作活動を続けています。

杉浦が作品制作をはじめた当時のアメリカは、ロバート・フランクやダイアン・アーバスに代表されるモノクロのストレート写真が全盛時代がありました。しかし、杉浦は写真というメディアの表現としての多様な可能性にいち早く注目し、カメラを使用しないで写真を制作するフォトグラムやコラージュによる作品制作を行うほか、写真の液体乳剤と油絵キャンバス、アルミニウムなど紙以外の素材と組み合わせるなど、実験的な作品制作に取り組んできました。

本展では1960年代後半からシカゴ、ニューヨークで作品制作を続けてきた杉浦の活動を通して、彼女が生きてきた時代背景と美術・写真の歴史の変遷を視ながら、杉浦がいかに先駆的であるかを浮かび上がらせようとする試みです。

主な出品作品 (予定出品点数 75点)

パート 1 孤 1966-67年 Cko

シカゴ・アート・インスティテュートでの学生時代の作品群。モノクロのフィルムでカラー印画紙にプリントをしたり、市松模様を施してみたり、写真の一部を多重露光してイメージをモンタージュしたりなど、カメラの特性や暗室作業を駆使し、実験的な手法により制作した。写真技術の基本を一通り習得した後、今度はそのプロセスを崩していくことで、創造の可能性が開けると考えていた。

パート 2 フォト・カンヴァス 1968-1971年 Photo-canvas;

写真－絵画 1976-1980年 Photo-painting

フォト・コラージュ 1976-1980年 Photo-collage

1967年にニューヨークに移住した後、感光材をカンヴァスに塗って白黒写真のイメージを定着させるフォト・カンヴァスを制作。アートディーラーのリチャード・ベラミーの批評を受け、試行錯誤の制作活動が続いた。セントラル・パークで撮影した岩のクローズアップをフォト・カンヴァスにした《セントラル・パーク 3》(1971)を、ホイットニー美術館のアンニュアル展「1972 Annual exhibition contemporary American painting」(1972年)に出品したのをきっかけに、杉浦の存在が広まっていった。その後も、当時、写真が絵画や彫刻よりも重要でないと思われていた認識を変えたいという思いで、新しい材料や手法にチャレンジし、自身の絵画を組み合わせた〈写真－絵画〉やフォト・コラージュなどに取り組んだ。

パート 3 フォトグラムとインスタレーション 1980年－ Photograms and Installations

写真と絵画を結びようとする試みとして制作されたフォトグラム作品。カメラを使わず、生物を直接印画紙の上に一晚置いた後、感光させた作品は、時間を記録する写真の特性を意識している。また、自身の手術をきっかけに興味を抱いたレントゲン写真のインスタレーションを、1996年にツァイト・フォト(東京・日本橋)で発表した。

パート 4 アーティスト、科学者、親愛な 1999年－ Artists, Scientists, Intimate

90年代から人物を被写体にした作品制作をはじめ。きっかけは1978年、ニューヨークでの篠原有司男との出会い。後に撮影した篠原のボクシング・ペインティングのパフォーマンスからアイデアへとつながった。篠原によって日本の美術界とも交流が広がり、アーティストと科学者などのポートレートシリーズへと展開していった。

パート 5 DG フォト・カンヴァス 2009年- DG Photocanvas

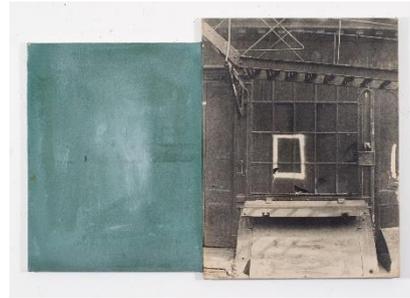
日本で撮影した最新作。デジタルプリントによる作品を初展示する。日本各地の岩肌のクローズアップは、初期のフォト・カンヴァス作品を彷彿とさせる。



1



2



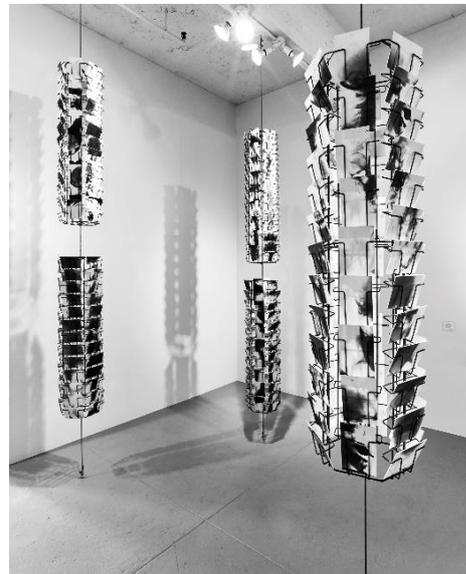
3



4★



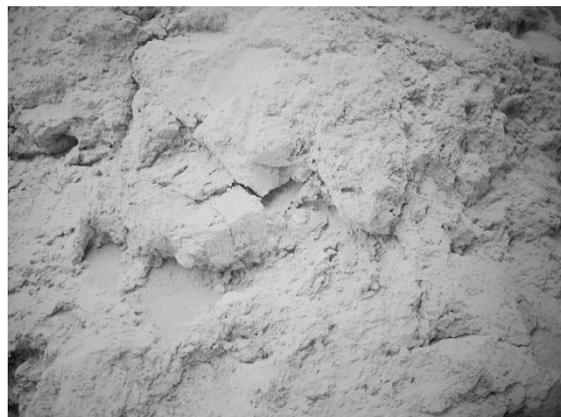
5



6



7



8

1) 《孤 #4-V2/2》1967年 発色現象方式印画 東京都写真美術館蔵 2) 《孤 #L9-V1/3》1966年 発色現象方式印画 東京都写真美術館蔵 3) 《市場の前面》1978年 写真乳剤 アクリル絵具 作家蔵 Courtesy of Taka Ishii Gallery 4) 《木の幹 2》1971年 カンヴァス 作家蔵 ★参考図版 5) 《飛び跳ねる D ポジティブ》1996年 黄色で調色されたゼラチン・シルバー・プリント 作家蔵 Courtesy of Taka Ishii Gallery 6) 《(レントゲン) 棚のインスタレーション》ゼラチン・シルバー・プリント アクリル板 金属製棚 作家蔵 7) 《ジェームス D ワトソン Dp2》2004年 ゼラチン・シルバー・プリント 作家蔵 8) 《桜島B》2016年 インクジェット・プリント アクリル絵具 カンヴァス 作家蔵

杉浦邦恵スペシャル・インタビュー

1963年に渡米し、67年からニューヨークを活動拠点とする杉浦邦恵は、表現の手法としての写真にいち早く注目した実験的な作品群で知られています。日本国内における初の回顧展を迎える彼女に、試みてきた挑戦の数々や、作品の制作意図などについて伺いました。
(2018年5月)

ニューヨークのアトリエにて



—1963年に二十歳で渡米されていますが、その当時、写真をファインアート（芸術）として制作することは、アメリカでも珍しかったのではないのでしょうか？

私が入学したシカゴ・アート・インスティテュートはシカゴ美術館の附属大学だったのですが、この美術館はアメリカの中でもかなり進んでいて、すでに写真作品を収蔵し、展示もしていました。また、すぐそばにはイリノイ工科大学があって、そこにモホイ＝ナジが創設した写真部がありました。ハリー・キャラハンやアロン・シスキンドがナジの教え子として有名な写真家ですが、私の指導教官だった2人の教授は、彼らの教え子だったんです。だから、とても特殊だったのかもしれませんが、たいへん恵まれた環境だったと思います。

—学生時代に制作された「Cko」シリーズでは、白黒フィルムでの二重露光やカラーモニタージュ、魚眼レンズの使用など、さまざまな実験を繰り返したとのこと。自分なりの方法を模索した時期だったのですか？

過去全体を振り返ると、大学生時代だけでなく自分はプロセスを通じて新しい作品をつくることに興味があるんだと改めて思います。写真は科学の産物だから、実験しながらプロセスを壊していくことで、新しさを生み出し、次の段階へと突破できる可能性があるんじゃないかと感じました。渡米する前、日本の大学では物理学を専攻していましたから、科学系のほうが自分にはなじみやすかったというのもありますね。

—「Cko」とは、どういう意味なのでしょう？

漢字にすると孤独の「孤」になるんです。「Ko」よりも「Cko」としたほうがしっくりきたんですね。渡米してからすぐにケネディ大統領暗殺事件があったり、しばらく英語で苦労したりといろいろありましたから、その当時の気持ちが表れていたのかもしれない。

—大学を卒業された後、拠点をニューヨークに移されました。1972年に、ホイットニー美術館のアニュアル展「1972 Annual exhibition contemporary American painting」に選出された作品《セントラル・パーク 3》(1971)は、まるで抽象画のような作品です。どのように制作されたのですか？

あれはモノクロのフォト・カンヴァスなんです。元の写真はニューヨークのセントラル・パークにある岩の一部をカメラで接写したもので、そのイメージを、感光材を塗った1.5×2mサイズのカンヴァスに定着させました。

—ホイットニーのアニュアル展はアーティストの登竜門とされる展覧会ですね。出展されたことでまわりからの評価や環境も変わったのではないのでしょうか？

出展できるのは作家1人につき1点だけでしたが、それでも反響は大きかったですね。美術館に収蔵していただいたり、ニューヨークのソーホーにできた新しい画廊で個展を開催したりすることができました。そのほかに、地方の美術館でのグループ展やアーティスト・イン・レジデンスに招待していただいたのですが、夫と離れて暮らすのがいやで、すべて断ってしまいました。たいへんもったいなことをしたと思います（笑）。

ーフォト・カンヴァスの後に、写真とペインティングを組み合わせた作品のシリーズを試みられていますね？

その頃、写真というメディアは小さな版画やドローイングのような位置づけで、絵画や彫刻よりも重要でないと思われていたの
で、その認識を変えたいと思い、新しい材料に注目したのです。



行き止り 小 1977-2009年 フォト・エマルジョン アクリル/
カンヴァス 東京都写真美術館蔵

ー80年代からのフォトグラム作品は、ドローイングの延長という意識で始められたのでしょうか？

ドローイングの延長というよりも、写真と絵画を結ぼうとする
試みです。花をフォトグラムにしたときに、その輪郭や影のニ
ュアンスがとても興味深かったので、自然物を材料にしたいと思っ
たんです。作品をつくっていると、自分では意識していなくても、
なんとなく日本の花鳥風月みたいになってしまふところがありま
すね。脳に蓄積されたイメージバンクみたいなものがあるんじゃない
かと感じます。

ーカエルやナマズを撮った作品は、生物を直接印画紙の上に置いて感光したそうですが、「The Kitten Papers (子猫の書類)」（1992）は、猫の姿はほとんど確認できませんね？

暗室の中、子猫を感光紙の上に一晚置いて、朝になってから感光しました。猫が過ごした時間が、体液などの物理的な痕跡によって記録されているわけです。写真に一瞬の記録と長い時間の積み重ねを盛り込もうという試みです。

ーニューヨーク近代美術館（MoMA）が開催してきたシリーズ展「New Photography」は、写真の最新動向を紹介する展覧会としていつも大きな注目を集めますが、1997年に参加されていますね？

「New Photography 13」に参加しました。出展したのは、花をモチーフにフォトグラムで制作した「Cut Flowers, Stacks」というシリーズでした。確かに影響はとても大きかったですね。あの展覧会の後、私から自分のことを説明しなくても、人々が「あなたは写真家だね」と言ってくれるようになりましたから。

ー90年代末から2000年代に制作された「Artists and Scientists (芸術家と科学者)」はアーティストや科学者のポートレイトをフォトグラムで撮影したシリーズですが、「after Electric Dress Ap2, yellow (電気服にちなんで Ap2, 黄色)」（2002）だけ、作家さんご本人ではなく、モデルを使って撮影されていますね？

あの作品は、田中敦子さんの作品「電気服」に触発されて制作したものです。1994年にニューヨークのグッゲンハイム美術館で「Japanese Art after 1945: Scream against the Sky (戦後日本の前衛美術)」展が開催されて、そこに出品されていました。そのあまりの美しさに、脳裏に焼きついて頭から離れなくなりました。言ってみればオブセッションのようなもので、彼女の偉大さを打ち破るための、私の挑戦だったと言えるかもしれません。作品にすれば、いつもそのことばかり考えなくても済むようになるんじゃないかと。ただ、彼女は日本に住んでいたからポートレイトの撮影は難しく、あの時はモデルを使って、クリスマスツリーのライトを巻きつけて撮ったんです。

ー今回、日本で初めての大規模個展となりますが、どんな気持ちで臨まれていますか？

せっかくだいた機会ですから、ベストを尽くしたいですね。自分にしかできないコミュニケーションの能力があるとしたら、それを発揮すべきだし、これまでいろいろなものをいただいて成長してきたのだから、作品を見てくださる方や次の世代にシェアしたいと思っています。

(インタビューと文 富田秋子)

※当館公式ホームページでは、ロングバージョンを掲載中！ニューヨークでの転機や9.11の心境なども語っています。

関連事業

① 杉浦邦恵によるレクチャー

2018年8月4日(土) 14:00-15:30

会場 東京都写真美術館 1階スタジオ

入場料 無料/要入場整理券 定員 50名

※当日10:00より1階総合受付にて整理券を配布。入場無料、整理番号順入場、自由席

② 対談シリーズ

2018年7月27日(金) 18:00-19:30

あがた森魚(ミュージシャン・映画監督) × 杉浦邦恵

会場 東京都写真美術館 1階スタジオ 定員 50名

2018年9月22日(土) 14:00-15:30

榎木野衣(美術評論家・多摩美術大学教授) × 杉浦邦恵

会場 東京都写真美術館 1階ホール 定員 190名

※当日10:00より1階総合受付にて整理券を配布。入場無料、整理番号順入場、自由席

※プログラムはやむを得ない事情で変更することがございます。あらかじめご了承ください

③ 展覧会担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第1・第3金曜日14:00より担当学芸員による展示解説を行います。

展覧会チケット(当日消印)をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

展覧会図録

出品作品図版、テキスト、作家年譜などを掲載した展覧会図録を発行します。

執筆者 ヴァージニア・ヘッカート(J・ポール・ゲティ美術館キュレーター)、榎木野衣(美術批評家・多摩美術大学教授)、鈴木佳子(当館担当学芸員) 発行 東京都写真美術館

開催概要

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

協賛：東京都写真美術館支援会員

会場：東京都写真美術館 2階展示室

東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tel 03-3280-0099 URL <http://topmuseum.jp>

開館時間：10:00-18:00(木・金は20:00まで) ※入館は閉館の30分前まで

休館日：毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は開館、翌平日が休館)

観覧料：一般900(720) 学生800(640) 中高・65歳以上700(560)

※()は20名以上の団体料金

※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料

※第3水曜日は65歳以上無料、7月26日(木) - 8月31日(金)の木・金曜日18:00-21:00は学生・中高生無料/一般・65歳以上は団体料金(※各種割引の併用はできません)

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版（4★を除く）をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。

なお、掲載点数が1点の場合は、展覧会メインイメージとして本リリース表紙にあります

《電気服にちなんで Ap2, 黄色》 2002年 黄色で調色されたゼラチン・シルバー・プリント

東京都写真美術館蔵

のご掲載をお薦めいたします。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いいたします。

また、図版のトリミングや文字掛け等の加工はできません。

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館

1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 <http://topmuseum.jp>

展覧会担当 鈴木佳子 y.suzuki@topmuseum.jp

広報担当 久代明子 平澤綾乃 前原貴子 press-info@topmuseum.jp